



警告のニュースレター「角笛」

発行日：2014年9月発行（第53号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

◎巻頭メッセージ 「戦争と戦争のうわさ2」 エレミヤ

◎証「主に、『道』を尋ねる」 E3

◎お知らせコーナー 「新刊本の紹介」

< 巻頭メッセージ >

「戦争と戦争のうわさ2」 by エレミヤ

本日は、「戦争と戦争のうわさ2」として、このことを見ていきましょう。

マタイ24:6 また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たのではありません。

24:7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。

前回私たちは、終末の日において、「対教会、対キリスト教」の戦争が起きることを見ました。それは、戦車や飛行機をとまなう、この世の戦争ではありません。しかし、神の宮、祈りの宮である教会の土台や、教理の土台を崩壊させる、信仰的な戦いであることを見ました。このことをもう少し詳しく見ていきたいと思うのです。

上記テキストを見ると、その戦争に関連して、「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる」ことが書かれています。このことを考えてみましょう。

<旧約における「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる」こと>

「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる」と書かれてあると、直接的には、全世界の民族が入り乱れて戦うような時が来るように思えます。しかし、ここに、たとえの意味合いがあるかもしれません。

このことを少し聖書的な観点で見てみましょう。旧約聖書には、多くの民族、国が描かれています。そして、それぞれの民族や国どうしの戦い、すなわち、戦争も過去には起きています。たとえば、イスラエルという民族があり、また国があります。その近くにエドムという民族があり、また、国があります。この2つの国は互いに何度か戦い、戦争を行っています。この2つの国、イスラエルとエドムを考えると、実はもとは同じ家族に属する2人の兄弟から始まった国どうしなのです。

すなわち、その先祖には、エサウとヤコブという兄弟があり、エサウが、後のエドムの先祖となり、ヤコブがイスラエルの国の先祖となっているのです。同じ血をわけた兄弟から、始まった2つの国が後には互いに戦争を行い、相手を滅ぼそうとする戦いを行うようになるのです。

さて、このことは、終末の日における「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる」とのことばを理解する助けになる、と思われます。すなわち、終末の日においても同じ血をわけた信仰の兄弟間において「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる」ことが起こりえると思われるからです。

普段の日においては、これらの兄弟間には、愛と平和の交わりがあります。しかし、教会時代の終わり、終末の時代においては、話が変わってきます。かつては、教会内において保たれていた同じ信仰の兄弟の一致や、平和が崩れ、逆に互いに争うようになります。その理由は教理の相違に基づく争いが起きるからです。

そしてそのような争いの状況をさして、「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる」と書かれています。さて、このことを理解する時、上記テキストに続く、以下のことばが理解できるようになります。

マタイ24:8 しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。

24:9 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。

24:10 また、そのときは、人々が大ぜいつまづき、互いに裏切り、憎み合います。

24:11 また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。

24:12 不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。

24:13 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。

これらの節を見て行きましょう。

「しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。」

「そのようなこと」とは、上記に書かれてい

る「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる」ことです。そして、そのこと、「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる」こと、すなわち、キリスト教の教団や、教会間、クリスチャン同士の間の争い、分裂、戦い、それこそが、産みの苦しみの、艱難時代の原因であり、その「初め」なのです。

24:9 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。

この節も、上記テキストの「戦争と戦争のうわさ」と関係があり、また、「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる」とことと関係があります。具体的には、キリスト教団の間の争い、戦争の中で、正しいクリスチャンが迫害されることが書かれています。さて、ここで迫害されている人々は全てのクリスチャンとは限りません。この件に関連して、同じ章の3節に以下の様に書かれています。

24:3 イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」

この箇所からわかるように、終末の警告は全てのクリスチャンへというより、少数の弟子に対して語られたものなのです。ですから、終末の日に苦しい目にあったり、殉教をするのは、主の弟子であることがはっきりとわかるのです。他の人たち、群集の歩みをする人々は、その日、必ずしも苦しい目に会うとは限らないのでしょうか。

「そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。」

その日、誰が私たちに「苦しい目に会わせ殺す」のでしょうか？そのことの参考として、主の初降臨の日のことを考えて見ましょう。その日、キリストを捕らえ、苦しい目に会わせ、そして十字架で殺した人々は、異邦の人々ではありません。逆に同胞であり、兄弟であるユダヤの群

集が、彼を十字架に追いやったのです。世の終わりにも同じことが再現するようになるでしょう。すなわち、終末の日において、昨日まで同じ教会に通っていた、兄弟姉妹が正しいクリスチャンを訴え、死に渡すようになるのです。それは、キリスト教会における教理の分裂、信仰の争いのゆえです。

何故そうなるのでしょうか？以前書きましたように、その終末の日においては、祈りの宮としての教会が崩壊し、その土台石である、使徒達や、預言者たちの教えも崩され、さらに救い主であるキリストに対する信頼も信仰も教会から失われるようになるのです。その混乱の中で、この世についてのクリスチャンはキリストを憎みまた、どこまでもキリストに忠実なクリスチャンを憎むようになるでしょう。そう、あの十字架の日のキリストに対する群衆の憎しみ、感情の高揚が再現されるようになるのです。同じ日に関してマルコの平行記事では、以下の様に書いてあります。

マルコ13:12

また**兄弟**は**兄弟**を死に渡し、父は子に死に渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを死に至らせます。

たとえの理解として、兄弟はキリスト教会における兄弟姉妹を指し、父子は、信仰の父子関係として、牧師と信徒間の関係をさすと思われれます。ですから、その日、これらの教会の兄弟姉妹の間、牧師信徒間において、教理の違いにより、訴えたり、死刑に渡すことが起きることが描かれているのです。

「また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。」

このことばをどう理解すべきなのでしょう？このことばを文字通りにとるなら、私の名、すなわち、イエスの名のゆえに私たちが世界中の人々から、憎まれる日がやってくるの予言です。世界中がキリストを憎むようになる？そんな日が果たしてやってくるのでしょうか？それは、本当でしょうか？

そんな日を我々は望んでいませんが、しかし、聖書にはっきりと預言されているなら、その日

は、残念ながら、確実にやってくると思った方が正しいでしょう。私の想像ではその日は、世界中を席卷する、あらゆる形でのキリスト個人へのネガティブキャンペーン、誹謗中傷の中で起きてくるでしょう。

イエス・キリストの歴史性、神性を疑わせるような本や、論文、神学、「歴史的発見」が相次いで、意図的に起きてくるようになるでしょう。そして、いずれ、世界中で、「イエス・キリストは実際は奇跡など行っていない」「彼は稀代の詐欺師だった」「キリストが偽り者だったことは歴史上の確定した事実」などといわれるでしょう。そして、挙句の果てには、正しくキリストを信じ続ける人々がカルト扱われるようになるでしょう。

そして、その中で多くのこの世の人々の常識がひっくりかえされ、世界はキリストを詐欺師だと認定するようになるでしょう。その日の問題はキリスト教会の対応です。悲しいこと、想像できることは、その日、世界のキリスト教会は全体として諸手を上げて、キリストに背を向け、キリストを裏切るようになるでしょう。以下のことばもそれを裏書します。

2テサ2:3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。

ここで、明白に背教と書かれているように、キリスト教会がキリストに背く日は、残念ながら、必ずやってくるでしょう。その中で、どこまでもキリストに忠実に歩もうとする弟子は、それらの惑わされたクリスチャンに憎まれるようになります。「また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。」と書かれている通りです。福音書に書かれていることは、初降臨の日、昨日までキリストを信じていた群衆がその日には、考えを一変し、怒りに満ちてキリストを捕らえ、迫害し、十字架に付けて殺したことです。同じことが再臨の日に再現するでしょう。昨日までは

キリストを信じていたクリスチャンが、世の中のムーブメントや、噂やら、風潮に押し流され、キリストに対して、熱狂的な憎悪を抱くようになるのでしょう。そして、その怒りの矛先は、正しく弟子の歩みをするクリスチャンに注がれ、彼らが憎まれるようになるのでしょう。

24:10 また、そのときは、人々が大ぜいつまずき、互いに裏切り、憎み合います。

これもキリスト教会の中で起きることの描写です。終末の日の惑わしの中、キリストに対する大々的なネガティブキャンペーンの中で、多くの人の信仰がつかずくなのでしょう。また、キリストを裏切るようになるのでしょう。

<赤い馬>

さて、この日に関しては、黙示録の中でも記載されています。以下の通りです。

黙示録6:4 すると、別の、火のように赤い馬が出て来た。これに乗っている者は、地上から平和を奪い取ることが許された。人々が、互いに殺し合うようになるためであった。また、彼に大きな剣が与えられた。

6:9 小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。

6:10 彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」

6:11 すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい。」と言い渡された。

この箇所を見ていきましょう。

黙示録6:4 すると、別の、火のように赤い馬が出て来た。これに乗っている者は、地上から平和を奪い取ることが許された。人々が、互いに殺し合うようになるためであった。また、彼に大きな剣が与えられた。

この箇所で書かれていることは先ほど見たマタイ24章の「戦争と戦争のうわさ」の箇所と同じ事柄です。「彼に大きな剣が与えられた」と書かれていますが、剣はみことばや教理に関するたとえです。ですので、ここで書かれているのは、教理論争のゆえにキリスト教各派の間に争いが起きることです。また、その争いの結果、お互いが訴えて死に至らしめるような凄まじい結末になることがたとえで書かれているのです。

「火のように赤い馬が出て来た。」

火は、霊的なことがらのたとえです。ですので、キリスト教各派の争いと、霊が関係していることがここではたとえで書かれているのです。実は、霊が下るとき、争いが起きるとということが聖書が主張することがらなのです。以下のことばを見ましょう。

ルカ12:49 わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。だから、その火が燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう。

12:50 しかし、わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょう。

12:51 あなたがたは、地に平和を与えるためにわたしに来たと思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、分裂です。

12:52 今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗して分かれるようになります。

12:53 父は息子に、息子は父に対抗し、母は娘に、娘は母に対抗し、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して分かれるようになります。」

火すなわち、聖霊が下れば、世の中リバイバルで万々歳であり、何の問題も起きないように思えるのですが、この箇所によれば、そうでもないようです。逆に火が下り、聖霊が下ったために、争いが起き、分裂が起き、「今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗して分かれるように」なることが描かれているのです。

何故なのでしょう？それは、霊と霊との分裂、争いが起きるからです。聖霊が下り、聖霊の働きがある時、必ず、悪霊の働きもあり、悪霊の霊に惑わされた人々の反発があるからです。その良い例はペンテコステの日です。かねてから、望まれていた約束の御霊が下り民に平和が訪れたかという、そうでもありませんでした。むしろ聖霊降誕の後、古い霊、惑わしの霊に導かれていた律法学者や、祭司長たちは反発し、分裂が起きました。

同じことが終末の日に再現するのでしょうか。終末の日においても、聖霊の働きとともにそれに反発する霊に導かれた人々が反対し、そして、両者の間で、争いが起きるようになります。そして、最後は訴訟沙汰、裁判沙汰になり、正しいクリスチャンが訴えられ、命を失うようになるのです。彼らが迫害されるその理由は、彼らがどこまでもキリストを正しいとし、キリストへの信仰を捨てようとしなからぬからです。

6:9 小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。

さて、同じ章のこれらの節には、「神のことばと、自分たちが立てたあかしのために殺された人々のたましい」について書かれています。

これらの人々が殺されたことと、上記節の赤い馬に関する「地上から平和を奪い取ることが許された。人々が、互いに殺し合うようになるためであった。」との記述は関係があることを知しましょう。これらの人々は、キリスト教会における教理論争、神学論争の上に命を失うのです。

具体的には、多くの惑わされたクリスチャンのゆえに彼らは命を失うのです。もうキリストの奇跡も、神性も、神の子であることを信じなくなった背教のクリスチャンの間で、弟子たちが忠実であるから、どこまでも神のことばの真実につき、キリストへの証をもち続けたゆえに命を失うようになるのです。

6:10 彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行なわず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」

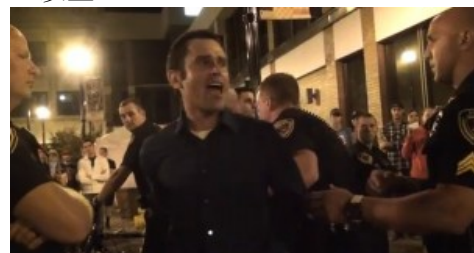
そして、彼等正しい弟子の歩みをするクリスチャンを殺す人々は地に住む者たち、すなわち、この世の論理に生き、この世の方法で生きる、この世的なクリスチャンなのです。

地に住む者とは何をさすのでしょうか？それは、地すなわち、この世に定住するクリスチャンです。そして、それは、地上において、旅人、寄留者であったアブラハムとは逆の生きかたです。

具体的には、聖書のことばより、受け入れやすいこの世の常識やら、この世の考えを優先するクリスチャンのことです。今で言うなら、この世のトレンドやら、世論に流され、聖書で禁止されている同性愛を受け入れたり、他の宗教の反発をおそれて、「キリストのみに救いがある」などとはいわない人々です。このようなクリスチャンが正しい弟子の歩みのクリスチャンを迫害する日、それが戦争の日であり、終末の艱難の日であることを知しましょう。

6:11 すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい。」と言い渡された。

ここでは、殉教者の数が満ちることが語られています。ですので、終末の日において、正しくみことばに立とうと志す人々においては、殉教の可能性のあることは正しく知しましょう。
—以上—



福音のために逮捕されるアメリカのクリスチャン

2011年の4月号で「この道」というテーマで証をさせていただいたことがありますが、今回はそのことに関連してさらに神さまの導きを感じたことがありましたので、話をしたいと思います。

以前、夢の中で神さまが「この道を歩みなさい、この道しかありません」と語ってくださいました。「この道」とは、「いのち(永遠のいのち)」に至る道のことです。それ以降、「この道」を目指して歩むようになりました。それから時を経て、去年の礼拝メッセージの詩篇での学びを通して、「この道」を歩むためのヒントについて、教えていただきました。その箇所を見てみましょう。

参照 詩篇25:4,5

25:4 主よ。あなたの道を私に知らせ、あなたの小道を私に教えてください。

25:5 あなたの真理のうちに私を導き、私を教えてください。あなたこそ、私の救いの神、私は、あなたを一日中待ち望んでいるのです。

このことばは、ダビデが神さまに捧げたお祈りです。アンダーラインのところをご覧いただきたいのですが、いずれも「**教えてください**」ということばが使われています。この時にエレミヤ牧師がメッセージされていたのは、以下のことです。

「神ご自身の中に救いがあります。しかし、入るべき所や行くべき道は、教えてもらわないと分かりません。自分で見出すことはできません。本当の道、命に至る道は

神さまに教えてくれないと分からないのです。でも、神さまが教えてくれたら分かるのです。」ということを語られていました。

このことを聞いて、「ああ、そうなんだあ。」と思いました。ダビデが「**教えてください**」と神さまに祈り求めているように、私たちも本当に天の御国に入りたいのなら、ダビデに倣っていかなければいけないんだ！きちんと祈り求めていく必要があるのでは？ということを理解しました。なぜかと言うと、エレミヤ牧師が言われていたように、自分で見出すことはできないからです。ちなみに「見出す」ということに関連して思い出すみことばがありますので、それも見てみましょう。

参照 マタイの福音書7:14

7:14 いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。

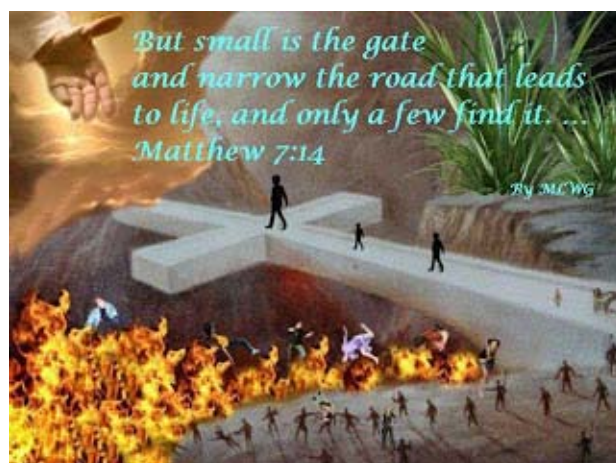
これはイエスさまが言われたことばです。「**その道は狭く**」とあります。このことばは詩篇の「**小道**」と同じことを言われていると思います。「天の御国」への道は「狭い」ことが分かります。つまり平坦ではなく、歩きづらい道だと言っているのです。それに続いて「**見いだす者はまれ**」とあります。「まれ」のところは、KJV訳では“few”(少数の、わずかの)と書かれています。なぜ「まれ」とか「少数」なのか？と言うと、かつての私もそのひとりでしたが、恐らく多くのクリスチャンが神さまから教えてもらわないからだと思います。でも、それは神さまが悪いのではなくて、聖書の視点から言わせていただくなら、神さまに尋ねないこと、祈り求めないことに問題があるようです。

福音書や黙示録に「**耳のある者は聞きなさい**」ということばが出てきます。もし、本当に聞くつもりがあるのなら、神さまに尋ねなさい、祈り求めなさいということをおっしゃっていると思います。それこそ、「いのちに至る道」に関して、神さまが教えてくださらないと分からないのなら、私たちが聞いていくしかないのでは？と思います。でも、大半のクリスチャンは求めないまま生涯を終えてしまうのではないのでしょうか？そしてあわや入れると思っていた「天の御国」から外されてしまうクリスチャンが多いのではないのでしょうか？ゆえに「まれ」とか「わずか」だと言われているのではないかと思います。しかし、それで良くはありません。「天の御国」に本当に入りたいのなら、「まれ」とか「わずか」にならなければいけません。しかも絶対に無理！なんてことは書かれていませんよね？聞けば教えてもらえるのですから、そのまま素直に実践していけばよいと思います。

たとえばどこかの目的地を目指してハイキングをしていた際に道に迷ってしまいました。そんな時にどうするか？もし、その付近にインフォメーションを見つけたら、そこで行き方を聞きますよね？そうするなら無事、到着できますよね？でも、ああでもない、こうでもない、なんていう風に単に思い巡らすだけでは、そこから先に進むことはできませんよね？はたまた迷った状態でいくら進んでも、あわや全く別の所に着いてしまったー、なんていう結果にもなりかねませんよね？「天の御国」へ通じる道も、同じことが言えると思います。キリストのガイド無しに

目指すのは無理がある、ということではないでしょうか？でも、きちんと聞いていくなら、的確な方向を示していただきながらも、最終ゴールである「天の御国」に入れるのです。反対に聞いたり、祈り求めていくことをしないときに、別の所(永遠の忌みとかハデスとか火の池と呼ばれる場所)に連れて行かれてしまう可能性がありますので、きちんと神さまに聞いたり、尋ねたり、祈り求めていきたいと思います。御心を感じましたら、ぜひ実践してみてください。今回も大事なポイントについて語ってくださった神さまに栄光と誉れがありますように。

—以上—



いのちに至る門は狭い

<お知らせコーナー>



- ◆神により永続を約束され、万世一系が決して途絶えないことを約束されたダビデ王朝は、400年の歴史の後、バビロン捕囚を契機に歴史の間に消え、その行方はようと知れない。
- ◆全能の神、聖書の神の堅い約束、「ダビデには、イスラエルの家の王座に着く人が絶えることはない。」との約束は破られ、万世一系は、果たして途絶えてしまうのか？
- ◆バビロン捕囚により、ダビデ王朝が行方不明となったのは、今から2600年ほど前のことである。
- ◆その頃、東の島国において、万世一系の王朝が誕生する。
- ◆この王朝、皇紀2600年を誇る万世一系の天皇家こそ、ダビデ王朝の正当な後継者ではないのか？
- ◆人種、言語、文化、習慣、歴史、あらゆる面において、天皇家とダビデ王朝には、類似性がある

エレミヤの新刊。「天皇家は万世一系のダビデ王朝の末裔である！」

定価：1500円+消費税。

ご注文の方は以下まで、連絡下さい。

警告の角笛出版： fax: 020-4623-5255, メール truth216@nifty.com